

# ヴィクトリア朝 少年たちを熱狂させたゲーム

08K031 岡本 学

## 序 論

18世紀、19世紀の時代、多くの子どもが生まれ、そして、幼くして死亡するなど、乳幼児の死亡率は驚くほど高かった。人々は、この世で罪を犯していないのだから天国に直行できて永遠の祝福が得られる、とこれをむしろ喜ぶべきと考えていた。一般的に、子どもにあまり関心を示さず、人の世話の必要な乳児期を過ぎると「小さな大人」として扱われ、大人に交ざり、一緒に遊び、働き、学んでいた。私的な生活の場もなかったため、母親は、子どもへの母性愛も持ち合わせていなかった。イギリスをはじめ、ドイツやフランスでも同様な状況で、近代社会になって、やっと子どものための玩具や子ども服が出現し、家族空間に子どもの居場所が存在するようになり、子ども期というものが誕生している。ヨーロッパの歴史を学びながら、このことを初めて知り、私にとっては大変な驚きであった。

子どもに対する扱いは、今では考えられないほどひどい扱いがなされており、現在では、虐待としてすぐに訴えられるようなことが、半ば常識的に行われていた。19世紀後半になり、子ども期というものがあることが初めて認識され、その対応がとられるようになってきた。日本が近代化を迎えたころ、イギリス、フランス、ドイツなどから近代的な知識や技術を導入するため、日本政府が招聘した人たちから、行く先々、日本の子どもたちについて、家族や近所の人々にかわいがられ、伸び伸びと育てられていることが異口同音に報告されている。残念ながら、当時のヨーロッパでは、3、4才から鳥追い、鉱山で穴の中にもぐり鉱石や石炭を集める、煙突掃除など、小さい体が求められる職場などでは、劣悪な環境の中で働く子どもが多くいた。

このような中、子どもの扱いに関する諸問題は、19世紀末期のイギリスにおいては、国を揺るがす大問題となっていた。子どもの雇用や労働問題、若者の非行、教育問題、怠惰や生活環境による身体的弱体化、などなど多くの問題を抱えていた。更に、人口増加に伴う都市開発、それに伴うインフラの整備不足、ポーア戦争の勃発など難問山積を抱える中、国民退化を危惧し、国の未来を託す青少年に対し、ローマ帝国没落の二の舞を踏むなど、青少年に向かって鼓舞する人物が現れた。この人物による行動と運動理念が社会に認められ、やがて、本人が予想もしない大ききとなり、世界に広がる運動に発展した。

我が家にホームステイしたことのある、ニュージーランドの友人がいる。機会あって、彼を訪れた時、ロッジに行くための準備をしていた。重要なポストに推薦され今日はこれを着なければならぬと、チャリとその衣装を見せてくれた。ロッジとは、フリーメーソンの会合で、彼は昔からフリーメーソンに加入していた。啓蒙思想と強い関係のあるフリーメーソンであるが、聞いても多くは語らず、考え方はボーイスカウトと同じようなものだと、常々、話していたのが印象に残っている。それぞれ時代は異なるが、両者ともイギリス文化の中で誕生したものである。

本論文は、子ども期の認識、階級差のある社会における青少年の育成、社会問題、教育問題、対応策など、激動したヴィクトリア時代後期の青少年に関係した歴史と文化、啓蒙思想との関係などを調べ、まとめたものである。

# 第1章 ヴィクトリア時代の家族と子ども

## 1 ヴィクトリア時代

ヴィクトリア時代は言うまでもなく、イギリス近代史上の黄金期であり、平和と繁栄、潤沢と自由、信仰と勤勉がそこにあり、社会には、みなぎった活力のある生活があった。太陽の沈まない帝国としてのイギリスは世界に対し、バクス・ブリタニカ（イギリスによる平和）を確立してこの時代全盛期を迎えた。しかし、表の豊かな繁栄に対しその反面、下層階級の人々の生活は極めて悲惨で、ロンドンの街頭には、貧しい社会的弱者や老人、子どもなどがたくさんたむろし、この中に、果たして幸せな生涯を終える人は何人いたであろうかと思えるほど過酷なもので、大きな社会問題となった。

王室ではスキャンダルが続き国民のひんしゆく的となり、不評続きの国王のあとを受け、若干18歳のヴィクトリアは1837年にイギリスの女王として即位、以後1901年までの64年間女王の座にあって、国民の信頼と尊敬を集め、イギリス史上最も栄華を謳歌したヴィクトリア時代の象徴として君臨することになった。

ヴィクトリア時代という名称が用いられるときには、厳密に女王の在任期間を示すのではなく、広義では1830年代から1890年代にかけて、また、より狭義では1840年代から1870年代までの30年間を、政治、経済、社会や文化の諸相が特徴的に表れていることから、イギリスの繁栄を極めた時代として使うことが多いようである。

ヴィクトリア女王の即位の頃から時代の流れが大きく変わってきた。長く続いた産業革命が一段落し、社会的基盤が農業から工業にシフトするとともに政治や社会情勢も変わり、農村部での土地の囲い込みが着々と行われて、解放耕地や共有地は大地主のものとなった。文字通り共同で利用する多くの農地が囲い込まれてしまい、農業の寡占化が進む一方さびれた農村には工場が建つなど、その情景も一変してしまった。

それまでのイギリスでは主たる燃料を木材や木炭、場所によってはピートに頼っていたが、燃料としての薪となる木材は切り倒され、シャーウッドの森などの森林はほとんど姿を消してしまい、それに代わる代替エネルギーが求められていた。そこでにわかに石炭が注目されるようになってきた。この代替エネルギーがもたらした影響には絶大なものがあつた。石炭をコークスにする方法が発見され、従来とは比較にならない熱エネルギーがコークスから得られ、それを利用して銑鉄が得られるようになった。銑鉄が可能となる銑鉄が世の中に大量に出回り、機械産業の基礎を築くこととなった。

イギリスの産業革命と言えば、ワットの蒸気機関を思い浮かべるが、この石炭を使った蒸気エンジンはあらゆる分野で活躍し、良質の鉄鋼材から生産される蒸気エンジンや機械製品が市場に出回ることにより工業化が進んでいった。蒸気エンジンも年を追うごとに改良が進み、紡績機械や印刷機械などいろいろな産業分野に応用され、エンジン革命は一気に加速することになった。

この新技術は輸送機関にも革命を起こした。大量の原材料や製品を速やかに搬送するための手段として、都市間を結ぶ幹線道路網や鉄道網そして運河も国中に建設され、蒸気機関による列車や汽船により大量の物資の輸送が可能となった。蒸気機関車による鉄道網は1830年以降、あっという間に国内にクモの巣のように広がって行き、イギリス国内の移動や輸送が極めて容易となった。

鉄道を頂点とする都市基盤の整備や拡充は、当然のことながら社会構造にも大きく影響を及ぼすこととなった。農業国から工業国にシフトしたことによる人口の移動と増加である。囲い込み運動が進み、先祖からの土地を追われた農民は、生活の糧を求めて新たに生まれた産業都市に流れた。結果として、農村は寂れる一方で都市人口は爆発的に増加することとなった。ちなみに、農村部全体として1750年から

1850年にかけて約1/3程度に人口が減少している。ロンドンでは、1750年70万人<sup>1</sup>であったのが1850年には250万人と増加している。国全体の人口自然増も著しいものがあり、医学の進歩や保健衛生のインフラの整備も進んだことと、大きな戦争がなかったことも幸いし、イングランドだけであるが、1770年の推定10万人から1851年には1690万人と増加し、右肩上がりの急激な変動があった。この人口増加は重大かつ深刻な影響を社会に与えることとなり、ヴィクトリア時代において、大きな社会問題に発展してしまった。

産業革命の進展とともに、社会全体の構造と変化に対応するため政治の世界にも変化があった。旧態依然の制度にあぐらをかいていた政治の世界にも改革を求める動きがあり、選挙法が改正され中流階級や労働者階級にも投票権が与えられるようになった。しかし、この改正は、中途半端なもので下層階級には反映されず、その不満が「人民憲章」をベースにしたチャーチスト運動となって爆発した。成人男子への普通選挙権、無記名投票、各年選挙、議員報酬、選挙区の比例配分などを記した案で、画期的な改正を求めるものであったが認められなかった。この憲章を掲げた労働者の組織運動は繰り返し議会に請願したが拒否され続け、次第にその活動エネルギーを失い、富と繁栄を享受する階層が増えるにつれ、不平不満を持つ人々は社会の片隅に取り残されていった。しかし、この労働運動は無意味でなく、労働運動を理論的に成熟させイデオロギー化し、19世紀後半の労働運動の思想的基盤整備に多大の貢献を果たしている。この労働運動の経験から、マルクスやエンゲルスらに提唱された、資本主義とプロレタリアとの階級闘争に弾みがつくこととなった。

ロンドンやマンチェスターでの労働者の悲惨な生活状況をエンゲルスは経験しているが、その大きな理由は職を求めて流入する人口の急増に対応できず、行き場のない貧困者の群れが街にあふれだし、その結果スラム化してしまったことであった。

一昨年と2012年の今年の2月に、ボランティアとして健康、保健衛生関係のプロジェクトでバングラデシュに行ってきたが、田舎ではそれを感じないが都市部では悲惨な貧困者の暮らしぶりが強く感じられる。産業構造の一極集中化により、国の首都に産業経済の中心が集まっているため、農村からの人口流入が多く、都市部でのスラム化が進み、物乞いやストリート・チルドレンが多く見られる。スラム化は、近代文明の生み出す歪のようなもので、近代都市が成立する過程で、悲しいかな、避けては通れないものなのかもしれない。現代でもアジアや中南米、アフリカなどでそれが見られる。

イギリスでこのように都会に職を求め、流入した人口のほとんどは、困り込み運動で住み慣れた土地を追われた農民たちで技術も何も持たない人であった。仕事を探しても肉体労働が多く最低賃金しか保証されず、失業者の多いことから競争も激しく、工場主たちは相手の弱みにつけ込み、情け容赦なく賃金の引き下げや労働条件を過酷なものにしていった。わずかな賃金と劣悪な労働条件でも仕事にありつけた人は良いほうで、ありつけなかった人も多くいた。汚物と悪臭に囲まれた想像を絶する世界で、どうにかその日の飢えをしのぐ状況であった。さらに不幸なことに、1840年代にヨーロッパ全土を襲った異常気象のせいで、イギリスは歴史に残る凶作に見舞われ、食うや食わずの暮らしをしていた農民にとっては大打撃となり、農民の都会への流出は加速していった。アイルランドではさらにひどく、人口過剰であった大都市めがけて、大量の飢餓難民が海を越えて押し寄せてきた。競争相手の出現で、労働条件はさらに過酷なものとなり、失業者の増大と共に都市のスラム化はますます深刻になっていった。これに対し、政府は劣悪な環境条件改善のための法律改正や都市の衛生管理について改善の努力を行っていたものの、その効果に期待するほどのものはなかった。

貧しい人々のその日暮らしの生活実態は変わらず、その人数も増える一方であった。そんな中、1834年に新救貧法が施行された。1601年に救貧法が施行されているが、これは浮浪者の取り締まりを目的と

したものであり、18世紀になって行き場のない失業者たちが労働によって自立できるようにと、救貧院が設立された。しかし、これらの施設に収容できないほど失業者の数が増し、事態の解決を図るために制定されたのが新救貧法である。新法は、従来院外まで救済の手を差し伸べていたものを暫時廃止し、救貧院の機構を徹底的に効率化し、そして、集中化しようとしたものであり、功利主義の思想に基づく合理化策であった。院外の働く意志のない人には援助を打ち切ることで、労働意欲を刺激し、その意欲を持たない人は救貧院に収容し強制的に労働を科すものであった。そのため、救貧院は院外で生活するよりも魅力のないものにする必要があった。周囲からは、バステューユ牢獄になぞらえ「救貧法バステューユ」と呼ばれるほど牢獄に等しい場所となってしまった。劣悪過酷な生活のもとで、食べ物も満足に与えられず、何一つ楽しみもない生活を強いられる場所、まさしく牢獄そのものであった。救貧院に入れられるくらいなら死んだほうがましだと思っている人も多くいた。そう思わせることが新法の目論見でもあった。

チャールズ・ディケンズ<sup>2</sup>の小説で有名な『オリヴァー・ツイスト』の冒頭に、救貧院直属の孤児院の食堂でオリヴァー少年が「お願いします。おかわりください」と教区で孤児院の院長にお願いする場面が出てくる。一日一膳の粥を与えられるだけで、わずかなお粥をすぐに食べきってしまい空腹に耐えられず、お代わりをお願いする人をくじでオリヴァーが引き当ててしまい、恐る恐るお願いする場面である。理事会は、この反逆児に対し5ポンドを添えて欲しい人に譲り渡すことを決定し、煙突掃除人が引き取ろうとするが、過酷な職業であることを知っていたオリヴァーが泣きながら訴えて拒否するという話がある。この孤児院の描写は読者に一大センセーションを巻き起こし、政府は見過ごすことができなくなり、その後、改善策がいろいろと講じられることとなった。

ディケンズは作家として、一般の人の目に見えないところに光を当てて真実を明らかにし、貧困に苦しむ人々を見て見ぬふりをする風潮に、果敢に挑戦し社会正義に訴えようとしていた。ヴィクトリア時代は、そんな反骨精神を持った若い作家の輩出した時代でもあった。ディケンズのような良心的な知識人によって、弱者の救済が叫ばれる一方、イギリスは着実に繁栄の基礎を築いていった。ヴィクトリア時代は激動の時代であった。近代国家誕生に伴う痛み、資本主義や社会主義とは何か、そして、産業革命を通しての工業化、人間のモラル、ヒューマニズム、貧困問題やジャーナリズムなど、現代の私たちに与えた影響は大きく、そこから多くを学ぶことのできる時代である。

## 2 中流階級の家族

『子ども期の発見』で有名な、フランスの歴史家であるフィリップ・アリエス<sup>3</sup>によれば、多くの子どもが生まれ、そして、幼くして死亡することが多かったこの多産多死の時代には、人々は一般的に子どもに無関心で、7歳くらいになると「小さな大人」として成人共同体に参加して一緒に遊び、働き、学んでいた。私的な生活の場もなく、母親は子供に対しての母性愛も持ち合わせていなかった。共同体の規制や干渉を常に受け、奉公人として他人が同居していた伝統社会の家族には、血縁家族集団だけのプライバシーも存在しなかった。近代社会になってやっと子どものための玩具や子ども服が出現し、家族空間に子どもの居場所が存在するようになり、子ども期というものが誕生した。子どもは親の愛情を一身にそそがれる対象となり、家族共同体の衰退や家庭外への生産の移行につれ、プライバシー尊重の機運も高まり、家族は他の集団と区別されるものであることが認められた。そして、「男は仕事、女は家庭」という性差による役割分担が誕生することになった。夫婦と親子の排他的な親密さや情愛による血縁家族は近代に誕生した、と研究分析している。

イギリスでのこの時代、特に中流階級では、家庭は「なにものにも代えがたい場所」として神聖化され、独特の家庭文化を形成した。上流階級の不品行を批判し、道徳と信仰を源として神聖化したプロテ

スタンティズムの一派であった福音主義は、女性と男性は全く異なる存在であり、男性に守られ内助者として家庭の中で働く女性こそ道徳の担い手であるという理念を説いていた。この理念を実践したのが、医師、弁護士、大学教授、などの専門職の担い手と経済ブルジョワジーからなる中流階級であった。贅沢をして墮落した上流階級や、規律のない下層階級とも異なる独特な階級意識を形成し、その象徴となったのが専業主婦の守る道徳的な家庭生活であった。ヴィクトリア時代の始まる1830年代後半には、工業の発展に伴い中流階級の中でも技術者や企業経営に携わる人の数が増えていた。外の世界で仕事をする父親が家庭に憩いを求めるようになり、「道徳の源としての家庭」さらに「幸福と安らぎの空間としての家庭」という言説ができる基盤が整いつつあり、家庭の重要性と女性の役割が強調されるようになった。

中流階級の経済活動に携わる人々は、激しい競争社会にさらされながらも富と能力と勤勉、努力次第で社会的威信を得ることができた。だからこそ、夫たちがきちんと整えられた快適な家庭の中で英気を養うことができるよう、女たちの役割は「家庭の天使」として癒しを提供することであった。幸福な家庭にふさわしい住居も郊外に求められ、ガーデニングがブームとなり、草木や花に触れながらリフレッシュすることができるようになった。家庭では暖炉が備えられ、部屋もプライバシーが保たれるような設計になっていった。教会行事であったクリスマスも家庭での行事となり、イースターや誕生日などと共に家庭で祝うようになった。

多くの家では使用人を雇い家事作業を使用人に委ね、主婦は仕事の管理が主で、家事作業には手を出さないのが主流であった。家庭内の子どもに関しては、女の子であればガヴァネス<sup>4</sup>に面倒を見てもらい、男の場合は寄宿舎付のパブリックスクールに入学させた。結果として「有閑マダム」となった家庭の主婦は、読書、手芸、お茶会、コンサート、オペラ、観劇、パーティー出席などで優雅な生活を送り、夫にとっては、これらが面子の誇示に不可欠なステータスシンボルにもなっていた。

### 3 労働者階級と下層階級の家族

この時代の一般的な労働者階級としては、製造業、鉱業、輸送業などの仕事に就く人、金属業での技師、鋳物の鋳造工、それにボイラーの製造工、印刷の植字工、そして徒弟奉公を終って一人前になった陶工、製鉄所の製錬工、繊維業、採炭業に従事する人などがいた。工業の発展と共に、大量生産と安くして速い輸送のおかげで、大量の市場取引が可能となり、町ではたくさんの種類の商品が大量に、しかも安価で店頭で並ぶようになった。時と共に物価の上昇もあったが、労働者の所得も同様に上昇していった。このように労働者が安定した生活が送れるようになったのは、大量生産と大量輸送のおかげである。

生活水準の向上に伴い、消費者の需要に応えるため、総合小売業が減少する一方で、専門化した小売業がおびただしく増加していった。労働者が身に着けている服装にしても古着や手製のものが多かったが、衣料業界に機械化が導入され、家庭では作れない靴や、ブーツなどの履物や流行を取り入れた衣料品が安価で市場に出回り、労働者の家族は見苦しくなく、寒い冬でも暖かい身なりをすることができるようになった。

毎日の食事も改善され、以前に比べはるかに変化に富み豊かになっている。夕食には肉や魚、野菜が並ぶようになった。パンが命の糧などという言葉は昔の話になってしまった。手の届かなかった、缶詰やびん詰などの保存食品と今まで口にしたことのないような食品も手に入るようになった。住宅環境も改善され、過密化の問題を解決するために、横よりむしろ高く建てることで、高層共同住宅が検討され建築されるようになった。この住宅は、一種特有の気楽さはあったにしても、スラム街の薄汚く無秩序で野蛮な生活を労働者から救ったことは幸いであった。身勝手な行為を慎み、近所の人を思いやりながら暮らせば、快適な文化生活が保たれた。労働者階級の中には、中流階級の生活にあこがれる人もいて庭付きの一軒家

を求める人もいた。家がどんなに小さくても、外部からの侵入を防ぐ意味で垣根や塀をめぐらせ、内部を一切見えなくすようにして、狭苦しくはあったが自分たちのプライバシーを守れるようにした家もあった。こうした生活こそが、乱雑で自分のものと他人のものも区別がつかないスラムの生活から逃れるようになった人々の切なる思いと、他人から干渉されない生活を求めた結果であった。しかし、規則正しく勤勉で、家庭を憩いの場とするような生活には、自分の欲望を抑え自制する習慣を持ち、少しの読み書きとそれなりの教養も必要であった。

労働者階級の住宅事情は大幅に改善されたものの、家庭の義務を果たすことは大変であった。楽しみとしての賭け事やバブやミュージックホールに入り浸る人も多く、同じ仲間との付き合いのため飲んで歩き、真夜中に路上で互いに腕を組み大声で歌を歌ったり、怒鳴り散らしたりすることは日常茶飯事であり、日ごろ中流階級の道徳や上品さをまねてはいるものの、アルコールが入ってしまうと本来の姿に戻ってしまう労働者が多かった。

労働者階級の宗教観については、教会、特に英国国教会は身分の高い人、即ち富裕階級のためにあるものと決めつける傾向があった。労働者を酷使搾取しながら敬虔なキリスト教徒を装う雇い主を知っていたし、自分たちが明日の食事にも事欠き、食うに困る生活をしているのに、教会に行く人々が贅沢をして浪費するのを見てきたからである。労働者には、休息と娯楽のための日曜日にわざわざ教会に行って過ごす理由が理解できなかった。教会に通う人々のように聖なる安息日ではなかった。朝は遅くまで寝ていて、その後食事を楽しみ、残りの時間を出掛けたり、酒を飲んだり、家族団らんで楽しく時間を過ごすことを好んでいた。従って、休日に教会におとなしく説教を聴きに行く理由がわからない労働者が多かった。

1870年の普通教育法による義務教育としての初等教育の実施が、国家の目標となり、国内のすべての子どもが学校に通えるよう教育設備を整えるように決めた。多くの子どもにとって、この制度は、単なる学習や基本的な教育以上の意味があった。それは、文字や算数を習うだけではなく、社会の道徳、価値観などを教えられ、消極的で狭き門ではあったが高等教育の門戸も開かれた。初等教育は3歳では任意、5歳から義務になり、7歳になると幼児科から少年科または少女科に移った。貧乏で生活の貧しい地区では、食事欲しさに出席している子供も多くいた。ロンドンでは、この食事のために5万人もの子供が出席していたとの記録が残っている。学校教育は効果があり、小さくひ弱そうな子供が多かったが、貧しい浮浪少年も手のかかる乱暴な子供も、初めて規則正しい監督を受け、勉学のおかげで次第に落ち着くようになった。ポロをまとった幼い浮浪者も、教師の目つきや素振りで静かで従順になり規則に従うようになった。学校は14歳で卒業となるが、就職を目指す子供たちにとっては就職口を見つけることは困難で、親や知人、親せきなど縁故関係を頼って職を探したが、縁故のない子供たちにとっては極めてむずかしい状況であった。

こうした生活を送れるようになった労働者階級であるが、未だに泥沼のようなどん底の生活に甘んじなければならぬ下層階級の人々も多くいたのが現実である。1890年頃の推定によればイングランド全体で、不況時には約120万人に達していたとの数字が残っている。職種としては、沖仲仕、工場の下働き、煉瓦積職人、雑役専門の労務者、露天商、廃品回収、街頭労務者などであり、貧困から抜け出せず、貧しさのために、日に当たることのない儲からない仕事で暮らしを立てなければならぬ人たちで、まともな生活から犯罪の道に転落しかねない瀬戸際の人たちであった。特に最悪の状態を味あわなければならなかったのはアイルランドから移ってきた人々であった。労働市場の最下層の労働力となって、どんな厳しい状況下であっても、イギリス人であつたら絶対に引き受けないような仕事でも何でも引き受けた。

経済不況が1873年頃から続き、各地の救貧院では収容者を屋外で寝かせたりするほどで満杯となった。巷には食べるものにも困り餓死する人も多くいた。労働者は、工場の規模が小さいほど、また、仕事

が組織だって整備されていない所ほど労働条件が悪く、悲惨で過酷な労働条件で働かされていた。最新の設計設備の紡績工場でさえも、蒸気で動く機械の騒音は耳をつんざき、鼓膜を破るほど大きく、人の声は全く聞こえず、話している自分の声すらも聞き分けることができないほど過酷な設備環境であった。

都市生活において、衛生環境が整えられることにより健康の維持は可能となるが、地域によっては、不潔でむさくしい路地、袋小路、裏通りといったところに住まざるを得ない人々が多くいた。トイレ環境は不十分で、多くは共同のトイレであり、下水も整備されていなかった。不衛生な環境がそのまま何か月も放置されていたり、家のない貧しい人がトイレを寝室代わりに使っていたりすることもあった。上水道の供給も十分ではなく、貧しい町の人々は、離れた貯水タンクや給水塔から水を運ばなければならなかった。住宅事情も最悪で、家事などについてはあつてないようなものであった。一軒の家に何家族も住んでいたりと、一部屋に夫婦と何人もの子ども、そして、同居人も暮らしていたりすることも多く、二つか三つしかないベッドで大勢での雑魚寝や、床でごろ寝することは当たり前であった。プライバシーの確保もされずトイレも無い、ゴミヤスで汚れた部屋で暮らさなければならず、その上、人口密度が異常に高かったため、コレラなどの伝染病はあつという間に広がることとなった。結核やジフテリア、腸チフス、発疹チフスなどの病気で命を落とす人も多かった。このように貧しい暮らしの中で、人々が健康な生活を送ることは難しく、体力のない老人や子どもにとっては過酷な環境であった。

父親の飲酒も問題となっていた。父親が疲れ切つて家に帰つてきて静かに休みたいが、周りは汚く、むさくしく、不潔なものばかりであり、家から逃げ出したいのは無理なく、その結果、外に出てアルコール飲料に頼ってしまうケースが多かった。一週間分の稼ぎを一晩ですっかり飲んでしまい、父親が出てくるのをバブの外で妻と子どもがじつと待っていることも珍しくなかった。

このような状況下では、家庭での子どものしつけや教育は二の次になってしまいがちで、父親は、仕事のある時は毎日12時間以上も働くため帰りは遅く、失業して、たとえ時間があつても子どもの面倒は妻の務めと考えて、面倒を見てやることはなかった。母親も、できるだけ仕事をして家計を助けたかったので、家にいることはほとんどなかった。このため幼い子どもは、両親以外の家族や他の家の年上の子どもたちが面倒を見るのが普通であった。1880年以降は、学校が貧しい家庭の子供を預かつて教育する重要な役割を果たすようになった。しかし、ほんのわずかな稼ぎでも家計の足しにするため、小さいうちから働きに出され、学校に行かない子どもが多くいた。幼児を含む子どもの労働問題は社会でも大きく取り上げられ、中でも少年の煙突掃除の実態が暴露され世間を驚かすことになり、法律の改正が図られたものの守られることはなく、過酷な労働条件の中で毎年何人もの少年が煙突の掃除中に命を落とすことにもなった。

エンゲルスがイギリスにおいて、各地の労働者階級の実情を見て本にまとめて出版したように、このような下層で働く労働者にとっての生活は、いつでも過酷なもので、厳しいだけでなく悲惨なものであった。社会正義に燃えた作家やジャーナリストにより、悲惨で過酷な実態が明らかにされ、世間の目に晒されるようになり、法改正など対策は講じられたものの、この非人間的な状況は、残念ながらその後も続くこととなった。そこから這い上がつて、かろうじて豊かさをつかんだ労働者階級にとっては、もし、自分の身の回りに一度何かが起こつた場合、家族共々再び過酷な生活に戻らざるを得ないこの現実、恐怖でもあつたに違いない。

#### 4 少年労働と煙突少年

子どもに対し、子ども期という特別な配慮もないこの時代、子どもは、大人と同じ基本原理で考えられ、肉体的には無力で経験もないことから、社会の一つの劣悪な部分とも見られていた。伝統性の強い農

村部では、長老支配における強力にして技能にすぐれ、権威のある父親への服従、という中に子供たちは置かれていた。そして、子どもたちは、家族を支える労働の部分と見られ、また、資産でもあった。

したがって、多くの子どもたちは、非常に若い年齢の段階から各種各様な作業に従事して、わずかな家計の足しにするため働かなければならなかった。農業作業への雇用が低年齢化したため、法的に年齢制限が設けられ、1867年には7歳以下、1873年には9歳以下の児童の雇用は法的に禁止されたが、残念ながらそのようにはならず、幼い3歳、4歳の幼児が、鳥追いや鳥の見張りなどの作業に従事していた。児童の作業労働の種類も多く、干草、穀物、ホップ、リンゴなどの収納や働き手を集めるための笛吹きなどもあった。児童に対する作業の過酷さ以上に多くの知識や技術が要求されるものでもあり、体力や忍耐力も要求される農作業を安い労賃で行わなければならなかったのが実情である。

工業地帯では、紡織、織物、陶磁器、染物、毛織物工場で働いている児童が多かった。紡績織物工業では、体力があまり必要とされなかったことから、体力の弱い女性や未成熟の児童、場合によっては幼児までもが低い賃金と長い労働時間の中で働かされていた。

鉱山労働作業においても同様で、鉱山作業従事者の児童の中には4、5歳で働いているものや7歳以下という児童がかなり含まれていた。坑内労働に関しては、法律で10歳以上との決まりがあったが、まったく守られていなかった。作業は過酷なもので、地下の坑道に沿って石炭を入れたカゴを泥の中で引きずって運び出すことや、坑道内の天井が低いことから四つん這いになって手で押すなど、泥まみれになっての作業であった。労働実態を調査した調査員が、あまりにもひどい実態で思わず目をそむけたとの報告もある。児童労働については、成年者にとっても相当に苦痛な仕事が、ときには幼児にまで課せられていた。各業種での法律による最低雇用年齢は守られず、児童は早朝から日没まで過酷な労働を強いられている状況であった。

最も悲惨で過酷な児童労働の一例として、煙突掃除少年がいた。煙突掃除のための児童労働の需要が高まったのは、当時の煙突設計にあった。何階もの高い家屋建築様式がロンドンにもたらされて以来、細く曲がりくねった煙道が取り付けられ、大人が沿道を登って煤払い作業を行うことが不可能になった。石炭が燃料の主役になり、燃焼をよくするため煙道を狭くする傾向になった。このため、貧困家庭や養育院や救貧院からの5、6歳の幼児が煙突掃除の場へ駆り出される傾向が強まっていった。救貧院で生まれ栄養失調の痩せた細い体つきの、『オリヴァー・ツイスト』に出てくるオリヴァー少年のような子どもは、打ってつけの商品であったのかもしれない。

煙突掃除の実際は、手にブラシを持ち、そして、ブラシと粗布で出来た煤よけ帽子をかぶり、シャツとズボンだけになり煙道に入る。右手でブラシを頭上にかざし、背中と両足で煙道の壁面を押し、ひざと左手を使いながら毛虫がこのような格好で掃除しながら上へ登っていく。いくつもの角を曲がったり、煤だまりが出来ている場所を掃除しながら登っていくのは想像を絶する仕事であった。過酷な仕事であるため、仕事に、椅子に座って眠るような格好で静かに死んでいく少年も少なくなかった。何日もの間、真っ黒に煤で汚れたまま寝起きしたり、煤を毎日吸い込んだりしているうちに癌に冒され病気で亡くなるケースも多かった。大都市では、何万本もの煙突があり、煙突掃除の需要も多く掃除中の事故も多かったことから、議会で問題になり、実態調査も何度も行われた。しかし、法律の規定があったにもかかわらず、ほとんど死文になっており、8歳という年齢制限は無視され、4歳、5歳、6歳という幼児がこの過酷な仕事に雇われていたことが明らかにされた。この過酷な作業を行った児童の実人数は判明していないが、闇に葬られた怪我や死亡件数は相当多かったものと思われる。これらの作業に従事させられた多くの幼児や児童は、誘拐されたか救貧院などからだまされて連れ出された子どもや、失業中の父親のもとで貧困家計を救うために、泣く泣く地獄の職場へ送り出された幼児や児童もいた。安い賃金で働かせるため、



このように危険極まりない作業を児童に行わせ、せつかくの労働力を死なせては損をするからと、損をしないように下から名前を呼びながら確認していたように、児童は明らかに「物」扱いしかされていなかった。労働者階級の中には、働こうにも働く場所のない父親が妻を稼ぎに出し、その妻が失職した場合には、生存のため止む無く資産である幼い息子を、このような地獄の職場へ稼ぎに出さなければならなかった貧困家庭も少なくはなかった。

## 5 フーリガンの出現

サッカーの試合で対戦相手のサポーターと乱闘騒ぎを起こしたり、試合が勝った、負けたでサッカー場外で大騒ぎを起こしたりするのがフーリガンである。と多くの人々の思うところであるが、フーリガンという言葉は、サッカーの試合とは直接関係なく、ヴィクトリア時代後期、労働者階級の娯楽施設であるミュージックホールに出入りし、徒党を組んで集団不良行為を行う不良若者集団の一般名称として使われたものである。暴力行為により新聞沙汰にもなったことから、当時のイギリスでは大きな社会問題になった。

日本が明治という新しい時代を迎えようとしていた1860年代、酒類を提供し催し物を行う、労働者階級の娯楽の空間としてのミュージックホールは増え続け、ロンドン市内では数百軒にも達していた。それまで屋外で行われてきた民衆娯楽の場が屋内に移り、労働者階級は、新たな気晴らしを音楽に求めるようになってきた。それにこたえる形で、それまで娯楽の場所としてのパブが様変わりし、音楽や踊りを提供するようになり、新しい娯楽施設としてのミュージックホールが誕生した。

19世紀末、ミュージックホールは、サッカーや自転車と共に少年少女の間では共通の楽しみの中のシンボルと化し、当時の値段で、日本円換算で300円程度の入場料を払えば、だれでも楽しむことのできる癒しの空間となっていた。1873年頃からの不況を契機に、経済構造が変化し始め、工場などの生産部門とは異なり、サービス部門で、熟練を必要としない低賃金の単純労働者が求められていた。駅やホテルでの荷物運び、馬車の馬引き、メッセンジャーボーイなどがあり、少年時代にしか出来ないような単純な仕事が多かった。学校では、暗記中心の詰め込み型授業が多く、教師の子どもに対する扱い方も不適切で、厳しい体罰を科すなど、運営方法に問題がある学校が殆どであった。これに反発し「学校は面白くない」との理由から多くの子どもたちが学校を飛び出し、このような仕事に従事していた。働きながら学校へ行く子どももいたが、学校へ行っていたのは、1000人の少年のうち200人程度であったとの調査結果もある。家計を支える戦力として働いた子どもたちであるが、収入の一部を自分の自由にできる小遣いとして使うことができるようになり、学校を飛び出した子どもたちは、技術や集団での規律を必要としない単純作業労働者となって働いた。19世紀の終わりごろには、「小さな大人」であった子どもたちが、自分たちは大人とは違う存在であることに気づき始め、自己主張をし始めた。サッカー観戦やミュージックホールに通える小銭を持った子どもたちの一部が行った自己主張としての反社会的行為とは、商店や学校の窓ガラスを割る。道路いっぱいに広がり通行を妨げる。日中から酔っぱらって相手かまわず喧嘩をふっかける。他の若者グループとすれ違おうと互いの名誉をかけて抗争する。止めに入った警官に石を投げ、暴力を振るう。などの行為であり、世間に恐怖を与えることとなった。青少年による集団不良行為は、フーリガン事件と呼ばれ、新聞に大々的に取り上げられ、イギリス中で同様の青少年による集団不良行為が起きていた。これらの不良行為は、子どもたちの甘えから来るもので、規律の緩み以外なものでもない、と大人は見ている。しかし、緩んでいたのは、子どもたちの精神面だけではなく、体力や身体面でも以前よりも劣っていることが後になって判明した。アフリカで起きたボーア戦争への志願兵の6割が身体的欠陥により不合格となった事実が分かり、イギリス国内に大きな衝撃を与えた。出生率の低下も問題視される中

でのことであり、イギリス兵士や男性の貧弱さがクローズアップされた。イギリス人の質的低下の事実、帝国の将来に深刻な影響を及ぼすと考えられ、いわゆる「国民の退化」問題と呼ばれた。このため、この問題を解決しようと「国民の効率」を高めようとする運動が起こった。「国民の効率」を高めようすることは、「男らしさ」の向上と考えられ、「男の子は男らしく」育てることが求められ、パブリックスクールでの教育の一つとして導入されたアスレティズムもその一つである。兵卒になろうとする労働者階級の若者の身体の健全性が低下していることと、軍隊で最も必要な「男らしさ」という大事な要素が欠けていることとは、日常生活の墮落からくるもので、「労働者階級の生活態度に問題がある」と軍関係者から厳しく指摘された。身体的弱体化と道徳的低下に蝕まれている大英帝国国民をこのままにしておくことはできないとの認識が高まり、「身体的墮落防止委員会」が設置された。この団体の活動が中心となり、若者の実情を調査・分析した結果、「国民の退化」の実態が明らかにされていった。青白い顔をして、背中を丸め喫煙や賭け事をし、ヒステリー気味である。移り気でカッとしやすい気質。発育不良ですぐに疲れる。おしゃべりで興奮しやすくスタミナも忍耐もない。などのフリーガンの実態もはっきりしてきた。こうした委員会での調査や議論の結果、都市に住み、街頭にて集団でたむろする労働者階級の不良若者集団であるフリーガンは、精神的肉体的にも劣った「国民の退化」の典型と見なされ、世間に広く理解、認識されるようになった。

このように社会問題となっていたフリーガン、そして、フリーガン予備軍の子どもたちは、イギリスにいる200万人の子供たちの内の半分以上とされており、このフリーガンもしくはフリーガン予備軍を無視してしまっただけでは問題解決にはならないと、国内では、帝国の再建を危惧し、学校教育や青少年育成のための団体の発足など、新しい解決策を模索しようとする動きが盛んになって行った。

## 第2章 ヴィクトリア時代の教育

### 1 パブリックスクールとアスレティズム

19世紀中期から後期にかけてのパブリックスクールは、アスレティズムと呼ばれた教育理念が色濃いのものとなっていた。この理念は、集団スポーツが人格形成のための有効な教育手段として重要視されたもので、クリケット、サッカー、ラグビー、ボート競技などの集団で行うスポーツは、男らしさ、忍耐力、協調的集団精神、フェアプレーの精神を養うものとして重要視されていた。このアスレティズムの考え方は、当時、異常なほどの過熱状態に達していた。時代としてボーア戦争勃発の前後のころであり、イギリス帝国主義の機運が高まったころである。

イギリス独特のエリート教育のための学校である、パブリックスクールは、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学に入るための予備教育校として位置付けられ発展してきた。大学に併設された寮に寄宿しながら勉強する特色を持っていたが、すべての学生が寮生活をするのではなく、寮以外からの通学生もいた。8歳から9歳までの男子が入学し、18歳から20歳で卒業することになっていた。1860年代から初等教育部分が切り離され、入学年齢が引き上げられ13歳又は14歳での入学となった。従って、10歳前後の子どもを含め20歳前後の大人の学生までが寮や学校で共同生活を行う社会であった。学校でのカリキュラムは、数学、ラテン語やギリシア語などの古典人文学の他に、後になり英文学、独仏語、自然科学や近代史などの近代学科も学べるようになった。進級は、学年進級ではなく能力進級制で、自分の能力により進級出来る特色を持っていた。このパブリックスクールの特色に、授業時間以外の構内自治を生徒に任せるプリフェクト・ファギング制があった。この制度は、構内秩序を維持するために発案実施されたも

ので、上級の先輩の中から選ばれた監督生や先輩がリーダー役となり、集団に分かれた下級生の面倒を見る自治組織となっていた。ある意味では集団専制的な支配社会となっていた。学校側の理解と責任体制もしっかりしていたこと、そして、生徒との信頼関係も厚く、年齢差や体力差はあるものの、学校内自治組織としては極めて効果的に機能した組織管理制度であった。特にアスレティズムという教育理念が普及したのは、このプリフェクト・ファギング制による組織管理制度によるところが大きく、その効果には大きなものがあった。学校での運動競技は、放課後の生徒による自主的な課外活動として行われることとなり、生徒の自治集団ごと体育の授業の中に組み込まれたような形になり、プリフェクト・ファギング制の運用は、生徒の自治意識を高め、人間関係や組織をまとめる意味で大きな効果があった。

パブリックスクールの教育の目的は、ジェントルマンを養成することにあった。19世紀のイギリス社会は、中流階級上層あたりを境に、ジェントルマンとノン・ジェントルマンに区別される階級社会で、文化的身分制度がはききしていた。ジェントルマンとしては、上流の貴族、国教会聖職者、法廷弁護士、内科医、陸海軍士官、上級官吏、オックスフォードやケンブリッジ大学の教授、パブリックスクールの教師などであった。後に、外科医、土木技師もジェントルマンとして見なされるようになり、有閑階級として位置づけられていた。ジェントルマンになるためには、ジェントルマンの文化、即ち、教養と働くことの意味を知り、目的志向を持ち、使命感と責任感を自覚し、イギリス帝国又は福祉国家のエリート養成理念として役立つ事を身に着ける必要があり、パブリックスクールへ行くことが、まずは不可欠であった。

パブリックスクールでは、集団スポーツが人間形成のための有効な教育手段として重要視された、と先に述べたが、運動競技を教育の手段として認めるのであれば、学校側として、それを正当化する教育思想が必要であった。運動競技を教育手段とする有力な精神的動機は、古代ギリシア以来のリベラルアーツ教育から来たものであるが、健全な肉体を鍛え上げることにより健全な精神と身体を保持することが可能となり、教育にとっては大変良いことである、と考えられた。この身体壮健をよしとする新しい教育思想は、教育界に限らず社会全体に広まっていた。「健全な精神は健全な身体にやどる」という標語はこの時代急激に広がりを見せていた。「神の創造の御業であるわれわれは、日々の勉強によって知恵と知識が得られる、それには身体の壮健を獲得する必要がある」という、身体の壮健をキリスト教により正当化した筋肉的キリスト教という新しい思想もあり、スポーツの有効性が唱えられた。たくましいジェントルマンになるためには、丈夫な体を持ち、スポーツを実践し、男らしさを保ち、英雄崇拜することが必要であると謳われ、世間に広く通用していた。そして、中世のカトリシズムは、優しさ、辛抱、自己犠牲といった女性的目標をよしとしたが、今は、「男性的な性格のすべてを神に捧げる」ことをよしとする理念に置き換えなければならない、とこの時代では考えられ、女性的ジェントルマンよりパワフルな男性的ジェントルマンへの変化が求められていた。

勝負に勝つためには、勇気、精神力、忍耐、快活、自制、規律、協同、集団精神が重要な資質で、男らしさが必要なスポーツにそれが求められ、アスレティズムの勢いもより活発となって行った。これにより、各パブリックスクールのスポーツグラウンドの拡充整備が大幅に計られることとなり、クリケットやサッカー、ラグビーの試合が同時に多数開催出来るようになると共に、学校周辺の運動競技場には、区画保護用の巨大な網も張り巡らされるようになっていった。

筋肉的キリスト教という強烈な考え方と、古くからの人文主義的な古典的リベラルアーツ教育を重要視する考え方が合わさり発展したアスレティズムには、拡大する帝国の植民地官僚に、知識よりも身体や忠誠心、服従や協調の精神を求める国の意図があった。集団スポーツが重要視されたのは、帝国の将来を危惧した男らしさの育成が求められたものであった。その意味で、アスレティズムは、ジェントルマンのアマチュアリズム精神と重なり、支配体制安定を目的とした教育手段でもあった。結局は、イギリス

帝国主義に繋がって行くものであって、帝国主義の到来と共にアスレティズムはその中に取り込まれ、そのイデオロギーの一部となって行った。

## 2 学校教育と青少年運動

1889年、スコットランドのエジンバラの南における学校のストライキの波はロンドンまで南下し、全国の都市に拡大して行った。ストライキでは、子どもたちはピケをはったり、街頭でデモ行進をしたり、集会を開くなど大人顔負けの運動を展開していた。学校ストライキの理由は、教師の生徒に対する体罰の反対、授業時間や休日などに関する拘束時間の低減、授業料の無償化と就学手当などの財政支援、教員人事や学校組織の問題などで、学校教育そのものに対し子どもたちは抵抗した。これは、学校教育の欠陥を暴露するもので大事件であった。子どもたちがミュージックホールやサッカー場に通ったり、街でブラブラしたりしているのは、自分たちが学びの場所として与えられたはずの学校が、面白くなかったからである。フーリガンの生まれた理由もこれに大きく関係している。1870年の初等教育法は、全国を学区に分け、公選制の学校委員会を設置し、地方税で運営する委員会立の学校を作り、5歳から13歳までの子どもたちの就学を義務付けたものであった。

義務教育制度が発足してから初等教育の授業の中心は、いわゆる「読み書きそろばん」であった。学校で子どもたちは、この「読み書きそろばん」をひたすら意味も分からず教科書の暗記、書き取り、足し算や引き算の繰り返しを行い、年に一度イギリス中の学校で実施される「読み書きそろばん」の試験に合格するよう指導されてきた。悪名高い「出来高払い制度」というものがあり、生徒の「出来高」、即ち、学校への出席率と「読み書きそろばん」の試験結果により、政府が学校へ払う国庫補助金額が決められてしまう制度であった。全体の成績が下位になれば補助金額が減少し、極端な場合には補助どころかマイナスになる学校もあった。金持ちになるのも貧乏で苦しむのも個人の価値観によるもの、悪いのは社会ではなく個人である、と考えるヴィクトリア時代の価値観、功利主義、自由競争原理を教育の世界に持ち込んだのがこの制度である。補助金には、学校運営費の他、教師の給料まで含まれていたことから、様々な弊害が発生した。当時、子どもは、精神的に幼く未熟であるとは考えられず、頑張ればできるものと考えられ、体罰で脅かされながら暗記を強いられ、計算が遅いからと言って叩かれるなど、体罰で脅迫されながらの授業であった。繰り返し使われる教科書を汚したと言って、鞭で打たれた子供までいた。補助金増額のため、統一試験時の監視人への賄賂や、教師も加担したカンニングなど不正行為が多発していた。自由主義原理を教育に持ち込んだ、出来高制度や罰のための鞭打ちに対して労働者階級の間では問題となり、批判の声も上がっていた。フーリガンは、このような教育の在り方に抵抗する子どもたちの行為であり、フーリガン化を防止するために、彼らを出来高払いという効率主義そして自由主義から解放し、人間性重視の教育を求める運動が展開された。1890年中頃には、博物館や美術館を訪問する課外授業も始まるようになり、郊外への遠足や自然に関する理解を深める自然観察なども取り入れられるようになった。授業科目も、地理、歴史、科学、縫い物などが加わり、多様化してきた。子どもたちの創造力と想像力そして情緒ある人間教育を阻んできた出来高払い制度は、次第に風化し、1897年のヴィクトリア女王即位60年の年に、この法律は廃案となった。

フーリガンが、社会や学校教育上問題視されている頃、中流階級の10代の青少年を対象としたボーイズクラブ運動があった。キリスト教的福音主義に基づくボランティア活動を主とし、少年少女が礼儀作法と道徳や目上の人を敬うことを習得するなどの目標を掲げ、聖書を読むことを基本として活動する団体であった。このほかにも、現在でも活動しているYMCA（キリスト教青年協会）や、サッカーを通じて「男の子は男らしく」をモットーにしたパブリックスクール伝道団、労働者階級の若者を対象にした勤勞

者少年クラブ連盟、などもあった。1880年～1890年頃から活動しているこれらの運動は、国民の退化と若者の不良化を結び付け、国家と教会に対する忠誠心と服従心を育成するため、聖書を通じて精神を鍛えようとした。この運動は、中流階級の子どもたちには受けたが、労働者階級の子どもたちには見向きもされなかった。もともと中流階級の子どもと労働者階級の子どもたちは、階級の違いから、共に行動しようとする気は持ち合わせていなかった。

この時代、イギリスはアメリカ、ドイツに経済的に追い上げられ、更に、生命線である海路に、巨大な軍事力を持ったドイツ海軍が睨みを利かせるようになってきた。大英帝国の危機感を感じた国は、未来を託す子どもたちの退化を食い止めれば、大英帝国は安泰となると信じていた。国民の退化現象が取りざたされている頃であり、中流階級の子どもたちの退化を食い止めようと模索していた。残念ながら、国民の大半を占める労働者階級には目が向けられていなかった。

そんな中、スコットランドのグラスゴーで新たな青少年運動が設立された。ボーイズブリゲード（少年部隊）である。ボーイズブリゲードは、聖書を読みながら精神的鍛練をベースに、一糸乱れぬ行進や縦隊列など、軍事的色彩を帯びた身体的鍛練を前面に打ち出したもので、じっとして聖書を読んでもいられない労働者階級の子どもたちを、屋外の訓練に連れ出そうとしたものであった。その背景には、グラスゴーでは、造船業が主要産業となっていたが、ドイツからの厳しい追い上げと当時の人口過剰が重なり、造船産業に対する一抹の不安が感じられていた。造船所の多くの経営者は、働く労働者が規律を守ることや時間の正確さ、組織の秩序を守ることが求めており、これを教えるボーイズブリゲードへ、階級を超えて多くの青少年の加入を勧めていた。

860年頃、南アフリカのトランスバール共和国で金鉱脈が発見され、イギリス人鉱山関係者が続々鉱山近くに住みつくようになった。現地ボーア人との摩擦に加え、ボーア政府から鉱山事業者に対し重税が課されるようになり、これに反発する鉱山業者の動きがあるなど、関係が悪化していった。国の資源を守ろうとするトランスバール共和国とイギリス人のへの不当な扱いの是正を求める交渉が続けられたが、交渉は決裂し、1899年10月戦争に突入した。いわゆるボーア戦争である。このボーア戦争時代、イギリス国内で頻繁に人びとにポスターなどで知られた人物がいた。陸軍少将であったロバート・ベイデンパウエル<sup>5</sup>である。トランスバール共和国の奥地マフェキングの戦いで、ボーア兵8000人に対し、イギリス兵800人を率いて戦い続け、217日の孤立無援の中、籠城の末、ついにマフェキングを開放に導き、これがきっかけでイギリス軍に勝利をもたらしたもので、イギリスではだれもが知っている有名なボーア戦争の英雄である。彼が籠城期間中、兵士の士気を高めるため行ったことや、町の少年たちを斥候として徴用訓練したことなど、彼の経験から得た敵地への偵察方法や、ルート開拓などの手法を、兵士用のマニュアルとして綴った小冊子『斥候の助け』を出版した。この本を、多くの小中学校の教師や青少年団体の指導者が指導の手引として買い求めていた。少年たち自身もこの本を競って買い求めていた。軍隊とは関係のない少年教育に、この本が利用されていたことに本人も驚いていた。そして、帰国した本人宛に、多くのファンレターが送られてきていた。1903年5月、ロバート・ベイデンパウエルは、ボーイズブリゲードの訓練披露大会に招待され、翌年グラスゴーの本部を訪れ、ボーイズブリゲード設立者であるウィリアム・スミスに会い、『斥候の助け』を高く評価していたスミスから、この本を青少年向けに書き直すことを提案された。そして、出来上がったのが『少年たちのための斥候』<sup>6</sup>で、発行と同時に全国に大反響を巻き起こすこととなった。

闘技場の剣闘士の試合に熱狂し、鍛練を忘れたローマ人兵士に代わって、ゲルマン人傭兵に帝国防衛を任せられた結果、やがて彼らに乗っ取られてしまい、ローマは滅亡した。イギリスも何時かそのようになるのではないかと、当時、帝国の将来を懸念する声がイギリス中に広まっていた。ベイデンパウエルも同様な

考えを持っており、国民の退化を防ぐためのボーイスカウト運動の設立構想が頭の中に広がっていた。1907年、この実験のためボーイズブリゲードから階級の壁を超えた20人の少年たちを集め、イギリス南西部に浮かぶ小さな島で実験キャンプを実施した。キャンプは大成功に終わり、その結果が写真付きで新聞に大々的に報じられた。実験キャンプ結果をもとに、加筆修正した『少年たちのための斥候』は、またまた、全国で大反響を呼んで飛ぶように売れた。階級の壁を越えて、少年たちが生き生きとしたチームワークで、大成功の内にキャンプを終えることができたことは、社会にも大きな反響があった。屋外活動を主とし、青少年に新鮮さを与えたこの本の影響もあり、さっそく青少年団体としてボーイスカウトが結成され、1909年にはボーイズクラブ、ボーイズブリゲードをはるかにしのぐ、一万人以上の少年がメンバーに名を連ねる大ききさとなった。その後、加入人数も益々その数を増していった。後に、活動内容を女性向にした、女子だけのスカウト組織、ガールガイドも発足し、スカウト活動はやがて全世界に広がる青少年運動となって行った。

フーリガンを国民の退化の象徴と考える当時の否定的な考え方を退け、正しく導けば勇敢な帝国の勇士になれば、肯定的にとらえ直すことによりフーリガンをも、スカウト運動の中に取り込むことができた。これに対し、ボーイズブリゲードやボーイズクラブなど他の団体から、フーリガンは青少年運動をダメにしてしまうと反対の声が上がったが、バイデンパウエルは、マフェキングの戦いの中で、18人の少年たちの見習いの隊を編成、訓練し、彼らに責任を持たせた結果、機敏、勇敢、確実性が大人にも劣らない事実を発見した。若者の有り余るエネルギーは、適切な訓練をほどこすことにより帝国の勇士として育成できると深く思うところがあったからである。ボーイスカウト活動の中には、年齢差のある自治集団としたプリフェクト・ファギング制度が基本となっていることや、男らしさ、忍耐力、協調的集団精神、フェアプレーの精神を養うゲームが用意されている。そして、ここには、バイデンパウエルがパブリックスクールで経験した事や、中世の騎士道精神に関するものなども多く盛り込まれている。ボーイスカウトへの入会に際しては、神へのつとめ、他人へのつとめ、自分へのつとめ、の三つの誓いと、誠実、友情、礼儀、親切、快活、質素、勇敢、感謝などの定められた掟を守ることを宣言する。18世紀～19世紀に最盛期を迎え、啓蒙思想をベースにして多くの知識人が入会した、イギリス発祥のフリーメーソンリーの入会儀式を思わせるものがあるなど、フリーメーソンリーを意識したと思われる所も多く見られる。いずれにしても、この運動は、ポーア戦争前後の大英帝国の危機を感じた中から生まれたもので、陸軍少将であったバイデンパウエルがフーリガン問題の解決も含め、青少年育成の新しい可能性を求め模索した意味は大きい。19世紀末、イギリス社会に芽生えたこの運動は、帝國的、軍事的な色合いを無くし、新しい世界観、時代感覚を感じながら、世界平和を目指すべく変貌を遂げて現在に至っている。

## 結論

イギリス南西部に浮かぶ小さな島での実験キャンプからスタートした少年運動は、105年を過ぎようとしている。161の国と地域が加盟し、約3000万人の青少年を擁する世界最大の青少年団体となっている。特に、東南アジアを含めた発展途上国では、人間形成の良さが認められ、学校教育の一つとして取り上げ、国を挙げて支援しているところも多い。スイスのジュネーブにあるボーイスカウト世界事務局によれば、イギリスで産声を上げてから、累計で3億人近くのスカウトを生み出してきたとのことである。イギリスで生まれたこの運動は、帝国の将来を危惧する社会背景から生まれたものである。その社会背景とはどんなものであったのか、子どもたちを取り巻く環境とはどんなものであったのか。ヴィクトリア時代後期の歴史を追いながら、調べてみたのが本論文である。

そこには、産業革命という大きな変革の波にもまれながら、子どもは、幼児期というものがない、単な

る大人の縮小版と考えられた時代があり、極めて過酷な状況の中で過ごさざるを得ない実態があった。学校教育では、エリート教育は別として、労働者階級や貧しい子供たちのために、1870年に義務教育制度が出来たものの、金持ちになるのも貧乏で苦しむのも個人の価値観によるもの、悪いのは社会ではなく個人であると考え、ヴィクトリア時代の価値観、功利主義、自由競争原理が教育界に持ち込まれ、出来高払い教育という悪名高い制度のために、子どもたちは散々な目にあっている。こうして学校を嫌う子が増え、大人とは違う自分というものに芽生えた子どもたちの中から、教育の在り方に抵抗する不良若者集団のフーリガンが現れた。フーリガンの出現は、世の中に大きなインパクトを与えた。フーリガンやフーリガン予備軍の中には、だらしのない日常生活を送る若者が多く、結果として男らしさに欠けた若者が増え、兵役検査では、6割が身体的欠陥により不合格となるなど、国民の退化現象が明らかになり、帝国の一大事となってしまった。当時のイギリスが抱えていた国民の退化現象に頭を悩め、パブリックスクールでは対応策が講じられて来たが、労働者階級には、残念ながら手を差し伸べるまでには至らなかった。

しかし、屋外キャンプやゲームを通して、若者の有り余るエネルギーを、少年らしい生き生きとしたチームワークや友情に変えることができるとした、ボーイスカウトの実験キャンプは、階級の垣根を超えることができることも証明し、誰もが経験したことのない快挙を成し遂げた。この運動には、プリフェクト・ファギング制やアスレティズムなどパブリックスクールでの経験が考慮されている。そして、ボーア戦争時代、マフェキングでの籠城中に、兵士の士気を高めるため行った行為や、町の少年たちを斥候として訓練した様子など、ベイデンパウエルの経験がゲームを通して学べると同時に、神への敬意、礼儀作法、自立性や協調性をも身に着けることができた。まさに、健全な青少年を育成することを目的とした標語に合致する運動であり、多くの青少年を虜にした偉大なゲームであった。創立者のベイデンパウエルは、ボーイスカウトはゲームであると常々言い、そして、文書でも書き残している。これを通して多くの青少年が育ち、世界中の青少年が現在もこのゲームに取り組んでいる。

---

## 注

- 1 ENCycLOPEDIA OF THE VIVTORIAN ERA G.A.R Library Publish p.226、『ロンドン辞典』大修館書店 p.891、『ロンドン歴史地図』東京書籍、『英国生活物語』晶文社 以上の書籍よりロンドンの人口の推移について引用した。
- 2 チャールズ・ディケンズ イギリスの小説家(1812~1870) ヴィクトリア時代を代表する小説家で、主として下層階級の人間を主人公とし、弱者の視点で社会を見つめ、風刺や社会を訴える作品を発表した。『オリヴァー・ツイスト』や『クリスマス・キャロル』などたくさんの人に支持されている。英国の国民作家とも言われている。
- 3 フィリップ・アリエス フランスの歴史家(1914~1984)  
『子どもの誕生—アンシャン・レジューム期の子どもと家族生活』において、子ども期というカテゴリーが近代の所産であることを示し、歴史学や教育学、社会学に大きな影響を与えた。
- 4 ガヴァネス(女性の家庭教師)  
専門教育を受けた中産階級の女性が、住み込みで子どもの教育と生活面で指導した家庭教師。専門教育を受けずにガヴァネスになる女性も多く、質の低下を防ぐためガヴァネス養成のため学校や、困窮したガヴァネスを救うための互助会も設立された。
- 5 ロバート・ベイデンパウエル ボーイスカウト運動の創始者(1857~1941)  
パブリックスクール卒業後オックスフォード大学を目指したが失敗し、陸軍士官学校に入学。42歳の時、軍人生活の経験から観察力、推理力を生かした偵察活動、地図づくり、報告の仕方など研究した『斥候の手引』(Aid to Scouting)を出版。1907年に少年達と共に実験キャンプを行い、ボーイスカウト運動の基礎を築いた。
- 6 『少年たちのための斥候』(Scouting for Boys) 『斥候の手引』を実験キャンプから加筆修正し、1908年に初版を発行。出版された直後から、イギリス中で大ベストセラーになり、この本を読んだ少年たちが各地で自主的に集まり、ボーイスカウトとしての活動を始め、現在のような活動に発展した。現在も、この本はボーイスカウトの必読書となっている。

---

## 参考文献

- アリエス、P. 杉山光信・恵美子訳 『子供の誕生』みすず書房 1971年。  
井ノ瀬久美子 『子どもたちの大英帝国』中央公論社、1992年。  
君塚直隆 『ヴィクトリア女王』中央公論社 2007年。  
佐久間康夫 他編著 『概説イギリス文化史』ミネルヴァ書房 2002年。  
菅野芳彦 『イギリス国民教育制度史研究』明治図書出版 1978年。  
田中治彦 『ボーイスカウト』中央公論社 1995年。  
ディケンズ、チャールズ 小池滋訳 『オリヴァー・ツイスト』上・下 筑摩書房 1990年。  
出口保夫編 『世紀末のイギリス』研究社 1996年。  
深沢克己編 『「啓蒙の世紀」のフリーメーソン』山川出版社 2009年。  
松村昌家 『19世紀ロンドン生活の光と影』世界思想社 2003年  
メイヒュー、H. 松村昌家訳 『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』ミネルヴァ書房 2006年。  
吉村正和 『フリーメーソン』フクロウの本 2010年。  
吉村正和 『フリーメーソン』講談社 2010年。

(卒業論文指導教員 佐藤渉)